# ギュルウィッチにおける「我等」の概念について

## —とくに「我等」の成立条件についての彼の説に対する疑問—

清　水　盛　光

### (一)

周知のようにギュルウィッチは，社会的現実を社会的交渉の諸形式 (formes de sociabilité) と集団 (groupements) と，包括社会 (société globale) の三つの段階にわけた。社会的交渉の諸形式が社会的現実の要素的関係であるのに対して，集団はそれらの要素的関係があつまって，一定の条件のもとで一つの統一体に統合されている状態であり，包括社会はさらに，多くの集団があつまって，一定の条件のもとで一つのより大きな統一体に統合されている状態であるというのが，社会的現実に三つの段階があるということの意味であるが，以上の三つの段階的な差異は同時に，社会的交渉の諸形式が，いかなる所，いかなる時代にも成立しうる抽象的性質のものであるのに対して，集団は，一面ではなお何ほどかの抽象性を示しながらも，他の一面では，すでにある程度の特殊性を帯びる現実的のものになり，最後の包括社会にいたって，歴史的・風土的条件の相違によって異なる，もっとも具体的な特質を表わすという差異をともなう。[1] この意味で，社会的交渉の諸形式について知ることは，ギュルウィッチの社会理論を明らかにするための出発点である。

以上のように社会的交渉の諸形式は，社会的現実のうちに見いだされる，もっとも要素的かつもっとも抽象的な社会関係であるが，ギュルウィッチはこの意味の社会関係の基本形式として，「我等」(nous) と「他者との関係」(rapport avec autrui) の二つをあげ，その違いを，前者が，相互浸透と相互参与にもとづく複数個人の部分的融合の関係であるのに対して，後者は，我，汝，彼というような，異質性と差別性をもち，また相互に超越しあう複数個人の間の，部分的対立をふくむ相互依存と相互連結の関係であるという点にもとめた。[2] これはギュルウィッチが，他者との関係が自他の間の差別意識をともなう個人と個人の関係であるのに対して，我等は，差別意識の消滅するところに生まれる，個人と個人の一体的統一の状態であると考えていることを示すもので，この点でギュルウィッチの我等と他者との関係の区別は，ガイガーが我等 (Wir) を，相互浸透と，個人の独立性の消滅とに伴って生まれる，人間の本質または存在における融合の状態と見，我汝関係 (Ich-Du-Verhältnis) を，閉鎖性と限界性をもつ独立的個人の間の相互的結合の関係とみて，[3] 二つを区別したのに似ている。しかもギュルウィッチの我等と他者との関係は，ガイガーの我等と我汝関係と同様に，相互に他に還元しえない社会関係の基本的範疇と考えられており，ギュルウィッチはこの立場から，アングロ＝サクソン系の社会学が，社会関係をすべて「間個人的関係」や個人と個人の「相互依存関係」に還元して，我等的融合の原本性を無視あるいは否定することに強く反対し，ただ一人の例外であるとしてクーリーの名をあげた。[4] クーリーだけを例外と見ることにはもちろん問題があるが，とにかくギュルウィッチがガイガーとともに，複数個人の融合，すなわち無差別的・一体的統一の状態を，我等の名のもとに社会関係の基本的範疇の一つとみて，差別的・相互的な複数個人間の連結関係と区別しようとしている点は，注目されねばならない。

ただその場合に注意を要するのは，ギュルウィッチとガイガーの我等が，ともに人々の融合の状態または事実そのものを指す言葉として用いられて，我等意識や我等感情として捉えられる，複数個人のもつ主体体験としての我等とはかならずしも同じではないということである。融合状態としての我等と，主体体験としての我等とは異なる。なぜなら，主体体験としての我等は，融合状態または一体的統一の関係にある人々のいだく主体的共同の体験であって，融合の状態や一体的統一の

関係でないとともに，その意識でもないからである。

人々のもつ「我」の意識が，個々人の一体的存在の事実でも，一体的存在性の意識でもなくて，ただ一体的存在をなす個人の自己を他と区別する主体としての自覚であり，自意識であるように，「我等」も，複数個人のつくる集合的存在の事実でもなく，集合的存在性の意識でもなくて，ただ集合的存在を構成する複数の個人が，一体の状態において自己を他と区別する一つの主体としての自覚であり，自意識である。主体体験としての我等は融合状態としての我等を前提として生まれ，融合状態にある人々はふつう，主体体験としての我等意識や我等感情をともなう。しかし，同じ我等の名によって呼ばれながらも，二つはあくまでも異なるものであり，人々の融合状態を我等と呼ぶことによって，その我等と主体体験としての我等とを混同してはならない。ギュルウィッチは融合状態としての我等について述べているだけで，かれには主体体験としての我等についての明瞭な記述がないが，もちろんかれも，融合状態にある人々が，主体体験としての我等の意識や感情をもつことを認めないわけではなかろう。むしろかれは，主体体験としての我等の意識や感情の人々における存在を認めるがゆえに，そのような意識や感情の前提となる融合の状態そのものまでも，我等と呼ぶにいたったのである。ガイガーにおいても，事情はおそらく同様であろう。我等という言葉はもともと，主体体験の内容をしめすための言葉として生まれた一人称複数の人称代名詞であって，融合の状態や事実を示すための言葉として生まれたものではない。したがって，ギュルウィッチとガイガーが融合の状態や事実を我等とよぶのは，我等という言葉の転用であり，便宜に過ぎない。が，とにかくギュルウィッチはガイガーとともに，融合の状態や事実を我等とよんで，複数個人間の相互的連結関係と区別し，また複数個人間の相互的連結関係とならぶ，社会的現実の要素的関係の一つと見ようとするのである。

## (二)

ところでギュルウィッチにおいては，以上に述べた意味の融合状態としての我等が，融合の程度によって集群態(masse)，と共同態(communauté)と，合一態(communion)の三つにわけられ，[5] 他者との関係も，社会結合の増減の方向によって接近(rapprochement)と，疎遠(éloignement)と，両者の混合形態の三つに区別され，[6] さらにそのおのおのについて，能動的のものと受動的のもの，組織的のものと自発的のものという二重の差異の存在が考えられている。能動的と受動的は，意志的色合が強いという関係の性質と，知的または感情的色合が強いという関係の性質の違いであり，[7] 組織的と自発的は，思慮にもとづく型にしたがって整序される予定的・計画的な作用の仕方と，一定の型をはなれて自由にはたらく直接的・自然的な作用の仕方の違いであるが，[8] とにかく要素的関係は我等と他者との関係にわかれるだけでなく，そのおのおのはさらに，結合の程度や性質や作用の仕方を異にするいくつもの形態にわかれるのであって，これがギュルウィッチによって，社会的交渉の諸形式と呼ばれているものの具体的内容である。

ギュルウィッチの社会的交渉の諸形式は，以上のように複雑である。が，そのなかでとくに重要なのは，意志的な我等と知的または感情的な我等の区別，すなわちギュルウィッチによって能動的我等と受動的我等と呼ばれているものの区別である。そしてこの区別において我等が意志的であるということは，別の言葉でいえば我等が行動的であるということであり，我等が意志的・行動的であるということは，我等が遂行さるべき「共同の仕事」(oeuvre commune)をもち，またそれを遂行するための集合活動をいとなむことを意味し，これに対して我等が知的または感情的であるということは，我等が知的または感情的な統一を実現するに止まって，遂行すべき共同の仕事をも，それを遂行するための集合活動をも伴わないことを意味する。[9] 既述のようにギュルウィッチは，複合するさまざまな社会的交渉の諸形式が，一定の条件のもとで統合されるところに集団が生まれると見るが，その場合に複合する社会的交渉の諸形式を統合して，その間に均衡と調和をもたらし，またそれらの諸形式に体系と秩序をあたえるのは実は，共同の仕事をもつ意志的な我等，すなわち

能動的我等である。集団はそれゆえに，受動的我等その他の社会的交渉の諸形式をふくみつつ，しかも能動的我等の統合作用のもとにあって成立する人々の統一体にほかならぬ。[10] しかし能動的我等も，融合状態としての性格においては受動的我等と同じであり，融合状態という共通の特徴によって二つの我等は，同じく種々の形態をもちながらも，相互連結という共通の特徴をしめす他者との関係と区別される。そしてこれが，我等と他者との関係の二つが要素的社会関係の基本形式であり，また基本的範疇であるといわれることの意味である。われわれのここでの主な問題は，上に述べたことを前提にして，融合状態としての我等，すなわち我等的融合一般が，どのようなメカニズムによって生まれると考えられているかの問題であるが，我等と他者との関係のこれまでに述べた性格上の相違は，両者の発生の仕方の相違とも結びついており，われわれはまず，その点についてのギュルウィッチの考えを明らかにすることから始めたい。

## (三)

さきに述べたように，ギュルウィッチは，他者との関係が部分的対立をふくむ独立的個人の相互連結の関係であるのに対して，我等は，相互浸透と相互参与にもとづく複数個人の部分的融合の状態であると見るが，かれはその融合を，したがってまたそれを生む相互浸透と相互参与を，人々の意識が開かれているところに成立する関係であると説明した。[11] そして我等的融合についてのギュルウィッチのこの主張は，同時に，他者との関係が，人々の意識の閉ざされたところに成立するという主張を暗にふくんでいる。すなわちかれは，人々の意識に開かれた部分と閉ざされた部分の存在をかんがえ，開かれた部分においては融合がおこり，閉ざされた部分においては他者との関係が生まれると見るのであって，別の言葉でいえば，これは，我等的融合が個人と個人をへだてる障壁の消滅するところに生まれる関係であるのに対して，他者との関係は，障壁をへだてたままで生まれる個人と個人の関係であるというに等しい。

それならば閉ざれた意識は閉ざされたままで，すなわち自他をへだてる障壁をこえて，どのようにして相互に連結しうるであろうか。ギュルウィッチによれば，閉ざされた意識が自他をへだてる障壁をこえて他の意識と結合しうるためには，間に媒介物がなければならない。そしてその場合に媒介物の働きをいとなむのは，象徴である。それゆえに他者との関係は，すべて象徴をとおしての関係であり，この関係は象徴的コミュニケーションとしてのみ成立しうる。象徴はいうまでもなく，言語，表情，身振り，態度，行為など，意味の表現となるもののすべてを含むが，象徴が閉ざされた意識に対して媒介物としての機能を営みうるための条件は，象徴の表示する意味が人々に理解されることであり，象徴の表示する意味が人々に理解されるための条件は，その意味がすべての人々に同じであることである。しかも象徴の意味のこの同一は，我等の存在を前提として生まれ，したがってギュルウィッチの立場では，我等の成立を明らかにすることは，我等そのものの特質を知る上で必要なだけでなく，他者との関係を明らかにするためにも不可欠である。[12]

ところで，閉ざされた意識についてのギュルウィッチの以上の説明から，われわれはただちに，閉ざされた意識の結合に必須の象徴による媒介が，[13] 開かれた意識の結合，すなわち我等的融合の発生に不必要であることと，それに伴っておこる，我等的融合の発生の仕方の特色を予想することができる。その第一は，象徴の媒介による結合の発生が間接的であるのに対して，象徴の媒介を伴わない結合の発生は直接的のものになるということであり，第二は，象徴の媒介による結合が象徴の意味の理解を必要とするのに対して，その意味の存在と理解を必要としない結合は，媒介的でなく，直観的のものになるということであって，ギュルウィッチ自身も，我等的融合が，直接的な集合的直観にもとづいて生まれることを繰りかえし指摘し，[14] ソロキンが人々の結合をすべて象徴の媒介によるものと見て，我等の発生を集合的直観によって説明することに反対したのに[15] 反批判をくわえ，ソロキンは我等と他者との関係の相違を理解しないと述べた。[16]

が，ギュルウィッチの我等の説明においてそれより重要なのは，かれが我等を集合的直観にもと

づくと見るだけでなく，さらにその発生の条件または契機として差異と類似の二つをあげ，この立場から，類似のみによって我等の発生を説明する立場に反対していることである。ギュルウィッチ自身は，集合的直観にもとづくという我等が，何ゆえさらに差異と類似を必要とするかの理由を説明していないが，これは多分，我等といわれるものがすべて一定の内包と外延をもつもので，我等一般というものはどこにもなく，したがって我等が成立するためには，その範囲を限るものがなければならないからであろう。そしてそのような条件または契機と考えられたのが差異と類似であり，我等的融合はけっきょく，一定の差異と類似をもつ人々の間の集合的直観によって生まれるというのである。ただ，我等の成立がこの意味で差異と類似を不可欠とするというとき，差異と類似の認識はすでに象徴の媒介を必要としないかという問題がおこるが，この点はとにかくとして，集合的直観がもし差異と類似を条件としてのみ生まれるものであるとすれば，ギュルウィッチにおける我等の発生の問題の中心は，我等が集合的直観にもとづくということよりも，集合的直観にもとづく人々の融合の過程において，差異と類似が具体的にどのような機能をいとなむかの問題となり，また類似のみによっては我等の発生を説明しえないという，ギュルウィッチの主張の根拠の問題となる。

## (四)

そこでまず，我等が類似のみによって生まれるという説に対するギュルウィッチの批評によれば，人々の間にもし類似や同一しかないとすれば，それらの人々は相互の連絡を欠いた同じ雛型のたんなる集まりに終って，我等として融合することはできなくなる。類似は人々を結びつけるよりも孤立させる。我等的融合はその成立のために，類似だけでなくて，類似とともに差異を必要とし，この二つを前提としながら，直観によって開かれた意識と意識の間に生まれる複数個人の統一である。しかもその統一は，成員のうちに内在すると同時に，成員を自己のうちに内在させるが，それ自身は多数の成員に還元されず，また要素に分解されない一つの全体を構成している。[17]

ギュルウィッチはこのように，我等の成立に不可欠の条件として差異と類似の二つをあげる。したがってこの観点からすれば，かれの例示した多くの我等，すなわち，遂行さるべき共同の仕事を中心に成立するという競技団体，合奏団，研究者団体，工場，企業，労働組合，協同組合，都市，町村，国家，教会などにおける能動的我等の発生や，それと区別として受動的我等の例とされた，同じ境遇に対する反応の支配する我等，偉大な人物または歴史上の出来事に関する集合的印象や集合的記憶の支配する我等，一つの価値，一つの観念，一つの教理，一つの伝統等の受容の支配する我等，友情，仲間意識，あるいは年令の近似から生まれる親和に対する誠実の支配する我等，同じ言語の使用の支配する我等などの発生が，[18] すべて差異と類似とによって説明されることとなる。もっともかれには，我等の具体例によるその発生の説明が一つもなく，したがってかれの見解を具体的事実についての説明をとおして知ることはできないが，とにかく我等がかれのいうように差異と類似とにもとづくものであるとすれば，その内容は当然に，かれの例示した我等のすべてを説明しうるような性質のものでなければならない。それならば，融合を生むという差異と類似とはどのようなものであり，またそれはどのようにして融合を生むとされているのであろうか。

そこでこのことを述べる前に触れておかねばならないのは，ギュルウィッチが，類似のみによる我等の発生の説明に反対するかれの既述の立場からくわえた，デュルケムの機械的連帯の観念に対する批評である。それによるとデュルケムは，類似にもとづく連帯を機械的連帯とよび，差異にもとづく連帯を有機的連帯とよんで区別し，機械的連帯のあることろにのみ集合意識の発生をみとめるとともに，社会は機械的連帯から有機的連帯にむかって進むと考えた。したがってこの観点のもとでは，集合意識は，社会の進化につれて次第に衰えてゆかねばならない。ところがギュルウィッチは，デュルケムの集合意識論が，集合意識と我等的融合の発生の問題を同時にふくむと見て，類似が集合意識の原因にならないと同時に，類似が

我等的融合の原因になることをも否定する。類似はさきに述べたように，人々を結びつけるどころか，かえって人々を離れさせる原因である。人々の我等への融合のためには，類似のほかに差異がなければならない。だから，デュルケムが類似によって機械的連帯を説明し，さらにこれを集合意識と我等的融合の発生に結びつけたのは誤りであって，集合意識と我等はともに，差異と類似とにもとづいて生まれる何ほどかの有機的連帯のあるところにのみ起る。[19]

このようにしてギュルウィッチは，デュルケムの機械的連帯の観念を斥けながらも，有機的連帯だけは，差異による連帯としてではなく，差異と類似とにもとづく連帯として認める。しかしこれだけでは，差異と類似が，したがってまた有機的連帯が，何ゆえに我等的触合の原因になるかの理由はなお明らかでない。必要なのは依然として差異と類似の意味であり，またそれがどのようにして我等的融合を生むかの具体的メカニズムである。

ところがギュルウィッチは，差異にともなうという類似の内容を明らかにせず，その上 affinité という言葉を，言葉の意味を明らかにしないままで類似の同一語として用い[20]，しかも類似のほかに affinité という言葉を，ことさらに使う理由を説明しなかった。affinité には種々の意味があるが，その一つに類似の意味があり，その限りでは，これを類似と同視し，また二語を併用することに特別の理由はないかも知れない。しかし自己の主張を明確にするためには，用語の意味は厳密に規定しておくことが必要であろう。が，ここでそれより問題なのは，ギュルウィッチが，差異と類似から，したがってまた差異と affinité から，我等，すなわち人々の融合が，どのようにして生まれるかの説明をはっきりしていないことである。もし用語の意味が明らかであれば，ある程度の推定を試みることができるが，その意味が曖昧であるために，それも不可能である。トゥルモンがギュルウィッチにおける類似と affinité の同視を批評して，affinité は類似ではなく，差異ある者の相互に依存しあう性質であろうと述べたのは，やはりギュルウィッチの用語の意味の曖昧からであり，しかもトゥルモンは，かれのこの解釈が，デュルケムの有機的連帯の観念への復帰となることを指摘した。[21] これはトゥルモンが，差異と類似を有機的連帯の原因とみるギュルウィッチの見解を認めないとともに，同じ差異と類似を我等の原因とすることも認められないと考えていることを示すものであるが，しかし，差異ある者の間の相互依存関係を我等的融合の状態と解することも，おそらく困難であって，これまた我等の発生の説明としては役だたない。いずれにせ，ギュルウィッチにおいて明らかなのは，差異と類似または affinité から我等が生まれるという主張の存在だけで，その主張は用語と内容の厳密な規定を欠いており，またかれは既述のように，我等の具体例を多数あげているにもかかわらず，右の主張を，それらの例によって論証するということをしなかった。

## (五)

以上のように，われわれは我等の発生についてのギュルウィッチの具体的説明をもとめて，求められるものがかれにないことを知った。が，この問題に関連するものとしてなお附けくわえて置きたいのは，ギュルウィッチが，あらゆる分化は affinité をふくみ，affinité は差異の増大に比例して強化されるといい，また我等における融合は，多数の我の個性化と affinité の増大につれて深さと強さをくわえると述べ，[22] さらに，分化は意識の affinité，すなわち類似を予想し，その affinité は，個性化にともなって正確により強まると書くなど，[23] 類似の主張を繰りかえしたなかの最後の文を，かれの同じ著書の後の版において，「分化は共同の基礎 (fond commun) を予想し，その共同の基礎は，個性化にともなって正確により強まる」という文にあらため，[24] 類似と affinité に共同の基礎という言葉を置きかえていることである。共同の基礎という言葉による類似と affinité の置きかえ，またはその同視が，何ゆえに一個所だけで行なわれたかの理由は明らかでないが，上にあげた三つの主張の類似と意味の関連からみて，同じ置きかえは多分，はじめの二つの主張のうちにある affinité についても不可能ではない。それば かりでなく，ギュルウィッチは，類似と affinité

を最初から，すべて共同の基礎の意味に使っていたと想像することもできる。これは想像であり，推測に過ぎないが，とにかくこの想像のもとでは，既述のギュルウィッチの主張は，差異は共同の基礎をもつことによって融合し，差異の増大は，共同の基礎の強化を伴うことによって融合をも強めるということになり，しかも共同の基礎という言葉の意味がある程度理解しうるだけに，仮定として述べた上の主張の意味も，少なくとも言葉の上ではある程度理解される。

しかし，差異が共同の基礎をともなうときに，果してその間から人々の融合が生まれるであろうか。差異はたしかに，共同の基礎をもつことによって結合する。何らかの共同の基礎なしに，差異が差異だけで結合することはない。が，差異がたとい共同の基礎をもつことによって結合するにしても，それは差異が差異として結合するのであり，その場合の結合の原理は差異であって，共同の基礎ではなく，共同の基礎はただ，差異が差異として結合するための媒介の機能をいとなむに過ぎない。すなわちそれは，差異が共同の基礎を媒介にして相互に補完しあう関係である。もしそうであれば，差異と共同の基礎のあるところに生まれるのは，連結的な他者との関係であって融合ではなく，したがってギュルウィッチのいう我等ではないであろう。

ところで，上のことを裏書きするような例がギュルウィッチに見られる。それは契約を他者との関係の一つとみるギュルウィッチが，その説明において，契約は差異と類似から生まれるといい，またこの場合の差異が契約者の利益の相違であるのに対して，類似は同位にある契約者の平衡であると述べていることである。[25] われわれは前に，ギュルウィッチには，差異と類似または affinité から，我等がどのようにして生まれるかの具体的説明がないといったが，上の例はかれが，我等の原因とみるものによってかえって，他者との関係の発生を説明しようとしていることを示すものであり，しかもこの関係において人々の平衡が異なる利益を結びつけるというとき，その平衡はあきらかに，ギュルウィッチのいう共同の基礎としての作用をいとなんでいる。すなわち，差異と類似から他者との関係が生まれるということは，実際には，差異とその間にはたらく共同の基礎から，他者との関係が生まれるということである。そしてこのことは多分，契約以外の他者との関係にもあてはまる。とすれば，ギュルウィッチによる類似または affinité と共同の基礎との同視は，差異と類似または affinité から我等が生まれるというかれの主張を明確にしうるどころか，この主張そのものに問題のあることを教える。なぜなら，類似や affinité を共同の基礎とみるとき，差異と共同の基礎から生まれるのが他者との関係であって，我等でないということは，けっきょく，我等の発生に関するギュルウィッチの説明が，我等の発生を説明しているように見えながら，その実，我等の発生を説明しているのではなかったことを示すものだからである。

## (六)

いずれにせよ，差異に伴うというギュルウィッチの類似と affinité を，かりに共同の基礎とみても，これを我等の原因とすることにはやはり問題がある。とすればわれわれはもはや，これ以上かれのうちに我等の発生の説明を求めることはやめて，かれとは異なるところにその原因を求めねばならない。そしてそれを説明しうるのは多分，ゲルダ・ワルターのいう対象志向の共同である。対象志向の共同は，ワルターが共同社会の本質的要素の一つとみているもので，ワルターはそれによって人々の一体的統一と，一体的統一にともなう我等体験の成立を説明しようとしたが，ただ問題はワルターが，対象志向の共同を「もまた……する人々」(Menschen, die auch……) の関係と説明していることである。[26] われわれがこのことを問題にするのは，人々の「もまた……する」関係は共通関係の存在をしめすだけで，共同関係の存在を示すものではなく，共同関係はただ「ともに……する人々」(Menschen, die……miteinander) の間に成立して，ワルターのいう「もまた……する人々」の間に成立する関係ではないと思われるからである。愛児を失った両親の悲しみについて，「かれらは同じ悲しみをともに感ずる」のであって，「Aがこの悲しみを感じ，Bもまたその

悲しみを感じ，しかもなおかれらは，かれらが同じ悲しみを感じていることを知る」のではないと述べたシェーラーの言葉は，[27] この点で注目に値いする。シェーラーはこの区別を，共同関係と共通関係の違いとしては説明していないが，われわれは悲しみについて述べられた右の例における「ともに……する」関係を，共同関係と見ることはできても，「もまた……する」関係を共同関係と見ることはできない。とすれば，ワルターの対象志向の共同が「もまた……する」関係でなく，「ともに……する」関係でなければならないことは明らかであろう。われわれはワルターの対象志向の共同をこのような内容のものと解して，そのうちに一体的統一の，したがってまたギュルウィッチのいう我等的融合の原因をもとめる。

ところが，この主張を裏づけるような事実が，たまたまギュルウィッチ自身の記述のうちにも見られる。それはかれが，他者との関係は，他の我等もしくは他の集団に対抗する必要があるとき，一時我等に転ずると述べていることである。[28] なぜなら，ここで示されている他者との関係から我等への転化の原因が，共同の敵を排除しようとする対象志向の共同のうちにあって，差異と類似または affinité や，差異と共同の基礎のうちにあるのでないことは，誰れがみても明らかだからである。しかもこの場合の人々の一体化や融合化は，トゥルモンがいったように，かれらの差異の一時的消滅，またはその作用の一時的停止を前提としている。[29] トゥルモンは，外部の者との対抗関係にある人々が，内部における差異や対立を抑えて協力することを，「共同戦線」という言葉で説明しているに過ぎないが，この説明の立場は，一体的統一の原因を対象志向の共同にもとめるわれわれの立場と，基本的には同じである。そしてこのことは，対象志向の共同が，共同の敵に対抗する場合の我等の成立だけでなく，ギュルウィッチのあげたすべての我等の例の発生をも説明する原理とならねばならないことを教える。たとえば受動的我等の例としてかれの挙げた，同じ境遇に対する反応の支配する我等，偉大な人物についての集合的印象の支配する我等，一つの価値，一つの観念，一つの教理等の受容の支配する我等，同じ言語の使用の支配する我等のどれを取ってみても，その我等は差異と類似でなく，ただ同じ対象にむける人々の志向の共同にもとづいているのである。

対象志向の共同による我等の発生の説明は，差異の人々における存否とは関係がない。ギュルウィッチはデュルケムが類似によって我等を説明する立場にあるとみて，この立場を否定したが，われわれも，類似がそのままで我等的融合の原因となることを否定する。しかし，類似のものに対する志向は共同化の可能性をもっており，類似と差異を比較すれば，我等の成立の可能性は，類似のあるところにあって，差異のあるところには存在しない。融合はもちろん差異をもつ者の間でも成立するが，それは差異を原因として生まれるのではなく，差異とともにある何らかの類似のものに対する志向の共同化にもとづいて生まれるのである。いずれにせよ，我等を融合とみて他者との関係と区別するかぎり，ギュルウィッチは我等の発生を対象志向の共同によって説明すべきで，我等の発生に不可欠であるとしてかれの挙げた差異と類似は，ただ他者との関係の成立を説明しうるに過ぎない。

1) Gurvitch, La vocation actuelle de la sociologie, 1950, pp. 98—100, 270—273, 288.
2) Ibid., pp. 111, 112, 119, 122.
3) Geiger, Die Gestalten der Gesellung, 1928, SS. 5—6, 21, 84—85 ; Die Masse und ihre Akiton, 1926, S. 9.
4) Gurvitch, op. cit., p. 117 et note.
5) Ibid., op. cit., pp. 111, 124f.
6) Ibid., pp. 111, 116f.
7) Ibid., pp. 111, 159 f., 167f.
8) Ibid., pp. 57, 110, 171, 175.
9) Ibid., p. 159f.
10) Ibid., pp. 269—270.
11) Ibid., pp. 91, 114.
12) Ibid., pp. 91, 118, 359, 378.
13) ギュルウィッチは，他者との関係にも直観にもとづくもののあることを認めて，友情と同情と愛情の三つをあげているが (Ibid., pp. 118, 167)，これは例外である。
14) Ibid., pp. 91, 114—116.
15) Sorokin, Society, Culture, and Personality, 1947, pp. 51—52 note.
16) Gurvitch, op. cit., p. 114 note.
17) Ibid., pp. 112, 113, 368.
18) Ibid., pp. 161—162.
19) Ibib., pp. 189—191, 199—200.
20) Ibid., pp. 113, 200, 369.

21) Toulemont, Sociologie et pluralisme dialectique, Introduction à l'oeuvre de Georges Gurvitch, 1955, p. 232.
22) Gurvitch, op. cit., pp. 113—114.
23) Ibid., p. 200.
24) この小論におけるギュルウィッチからの他の引用は，初版本によっているが，共同の基礎という言葉による類似と affinité の置きかえが行なわれたのは，第三版においてである (Tome I, 1963, p. 219)。
25) 契約の説明は，初版本のものが (p. 200)，そのまま第三版でも繰りかえされている (pp. 218—219)。
26) Walther, Ein Beitrag zur Ontologie der sozialen Gemeinschaften (Sonderdruck aus Jahrbuch für Philosophie, Bd. VI, 1923, SS. 18—19, 20, 24, 49, 69f.)
27) Scheler, Wesen und Formen der Sympathie, 5. Aufl., 1948, S. 9.
28) Gurvitch, op. cit., p. 122.
29) Toulemont, op. cit., p. 233.